

上村 美紗希 (法学部法学科)

## はじめに

私は、立教大学の司書課程で図書館学に関心を持ち、図書館学分野での大学院進学を志し、筑波大学図書館情報メディア研究科博士前期課程に合格をいただきました。今後私と同じく、他学部・他大学から図書館学の専門課程に進みたいと思う方の参考となることを願って、体験記を書かせていただきます。

## 1. 志望動機

図書館学という分野については、高校生の時から関心を持っていたので、卒業論文のテーマにするなど、独学で文献に目を通す習慣がありました。大学で司書課程を受講することにしたことも、就職活動のためというよりは純粋に知的好奇心の面が大きかったのですが、学習が進むにつれてより深い関心と問題意識を抱くようになり、大学での学びの主軸になっていきました。そのため、二年次生の頃からは司書職への就職よりも大学院への進学の方に志望をおいて活動しており、学年が上がると学部の講義選択も更に図書館学との関連を意識したものになっていました。

立教大学の司書課程でも演習系の授業や先生方の個別のご厚意によって、学部生でも図書館学について自主的に学びを深めることができる環境にあります。一方で公的にはあくまで資格取得講座としての立場に留まっているため、内部進学の場合は教育学科に所属しながら、独自に図書館学を研究することには不安も感じました。そのため、思い切って図書館学の専門家がより多く所属している専門の大学院に進学することを望み、特に関心領域の専門性の厚い筑波大学に志望を絞りました。

## 2. 受験までの過ごし方

1年次……学部の必修科目が多かったため、そちらを欠かないようにしながらも、司書課

程の必修を出来るだけ早く取るように心がけていました。図書館学への興味が高じていた時期だったので、講義内で紹介された文献にはなるべく目を通し、レポートや発表など自分の意見を表明できる機会にも積極的に取り組むように心がけていました。

2年次……学部の講義数も増えますが、司書課程も2年目が最も必修講義の多い時期でした。加えて1年次に資料管理や保存の分野について興味を持った中で、領域の重なる部分のある博物館学の知識も得たいと思い、学芸員課程も併修し始めたため、授業や課題だけでもとても多忙に過ごしていました。図書館学でも演習系の授業では先生方と直接言葉を交わす機会などが増え、法学部で学んだ公共政策論や現代政治理論などから、図書館の地域サービスや公共性という観点を認識するようになり、後に決める研究テーマの基礎となる問題意識を抱えるようになった時期だったと感じています。

3年次……学部の単位はこの年で取り終わることを目標としていたため、そちらにも力を入れつつ、司書課程は残りの必修科目と、関心のある選択科目を受講していました。実習はこの年に国立国会図書館でさせていただきました。また、司書課程での学びの総まとめとして受講した図書館総合演習では、先生や先輩の助言を得ながら、自身の問題意識を研究論文としていく手法を学ばせていただいております。

4年次……いずれの課程も殆ど単位はとり終わっていたため、受験準備と図書館学の自主学習に費やした一年でした。博物館実習では、図書資料と関連の深い館種であることを意識して、神奈川近代文学館にお邪魔させていただきました。この年も図書館総合演習を再び受講し、受験に必要な演習論文を執筆すると共に、主催してくださった図書館見学などに参加していました。しかし3年次の終わりごろから自分が行っていることへの疑問が生じて、それから勉強の手が止まったまま時間を浪費してしまっていました。そのため、秋期の入試は諦めて春期入試に絞って受験しています。

### 3. 受験対策

筑波大学の図書館情報メディア研究科は、国内にいくつかある図書館学の専門科の中でも特に人気が高く、毎年倍率は2倍弱程となっています。また、試験の方式は事前に受けたTOEICのスコアと、当日行うプレゼンテーション（発表7分／質疑応答20分程）によるので、筆記形式の専門試験のように明確な対策は取りづらいものとなっています。そのため、筑波大学の専願はリスクが高いと感じ、立教大学の図書館学の先生が所属している文学部教育研究科を併願する見込みで準備を進めていました。

英語については、図書館学自体が欧米から進展している面が大きく、語学力は必須であると言われていています。そのため、私も英語はあまり得意ではないなりに少しずつ学習は積み重ねていました。入試にTOEICが必要となるとわかってからは、定期的に受験して学習の進捗を測っていました。とはいえ、語学自体はあくまで専門分野を学ぶための前提知識に過ぎないため、そちらに注力しすぎる必要はないと捉え、入試において満点扱いとなるスコア（730点）に満たなくとも、ある程度の点数を取ったところで手を止めています。

図書館学の専門分野については、筆記試験がないこともあり取り立てて受験を強く意識した学習はしていません。しかし、司書課程はあくまで資格取得と実務のための知識を中心に行っているため、そこで学んだものだけでは不足する面はあるものと思われます。そのため、演習論文を書くにあたって、概論的な資料を何度となく参照したり、その分野の資料はほとんどすべて目を通すつもりで論文記事を探したりしています。図書館学に関わる情報は出来るだけ日常的に触れるようにしていたこともあり、その中で身につけていった知識で口頭試問はある程度乗り切れたように思います。

入試におけるプレゼンテーションの構成は特に奇をてらったものではなく、事前に提出した研究調査書（これまでの研究内容）と志望理由書（今後の志望研究テーマ）の形式に則り、1. これまでの学習・研究について、2. 大学院での展望と大きく二つに分け、図書館の地域サービス及び MLA（博物館・図書館・文書館）連携という研究テーマを全体を通して話しました。質疑応答でもこのテーマに関する現状への意見や専門知識、学部の知識とどのように関連付けているかを問われました。プレゼンテーションの資料を作ったのが入試直前だったのもあり、途中で幾度も言葉に詰まってしまい練習不足を痛感したので、研究テーマに最後まで迷っていたこともあるのですが、決意も含め準備は早めに進めるべきだったと反省しています。

## おわりに

私自身の合格経緯は、入試形式が特殊であったこともあり、系統だった学習を進めていたわけでもないため、一般的な入試対策としてはあまり参考にはならないかもしれません。

ですが学部での4年間、モチベーションに浮き沈みはありながらも、日常に図書館学に関わる視点が根付いていたように感じています。図書館学に纏わる情報に敏感になっておくことは勿論、娯楽としての旅行の中でも図書館や博物館に足を運んでみて、その地域の背景と共にどのような運営となっているのかを軽く調べてみる、そして触れた情報について自分で考える習慣をつけるなど、日頃の些細な積み重ねが形となったことが、入試でも見て頂けたのではと思っています。

そして何より、先生方から手厚いご指導をいただくと共に、学生同士でも知識や考察の共有が出来たことが大きな助けになったと感じています。特に最後の一年間は、中々受験に集中することができず、入試の準備も中々進められなかったため、周りの方々に沢山の心配をかけてしまいながらの受験となりました。最後に合否を決めるのは自分次第ではあるのですが、多くの方々のご助力あってこそその今があるのだと強く感じております。そのため、この場をお借りして、お礼を述べさせていただきたく思います。また、今後も立教大学の司書課程から図書館学の興味が高じて進学を志す方に、私の体験が僅かなりとも足がかりとなりますことを願っております。